

せつだい日記

入学編

Y.M.

オクラを見つけた話
レポートをぎりぎり
で提出できた話
あとがき

1
7 7 3

オクラを見つけた話

オクラとは、夏が旬の野菜である。緑色で、断面は星のような形をしている。どのような理由があつて星形の断面を有しているのか、なぜあのように独特の粘り気をもっているのか。オクラという野菜はつくづく不思議な食べ物だと、私は思う。

いつものように自転車で登校してきて、いつものように自転車置き場を出ようとした時だった。それは偶然、目に飛び込んできた。緑色の細長い野菜……そう、オクラである。「緑色の細長い野菜」というと個人的にはキュウリが真っ先に頭に浮かぶのだが、そこにあったのは紛れもなくオクラであった。包装されていないのでスーパー等で購入した物でないことは想像がついたが、それ以外の情報は得られない。

なぜこんな場所に、オクラが落ちているのだろう。

その瞬間、私の頭はフル回転を始めた。

誰かが講義前にオクラを購入し、講義室へ向かう途中で落としたのかもしれない。包装がないことも、直売所でそのまま売られていた商品だと考えれば、一応納得は出来る。しかし、なぜ一日の講義が全て終わった下校時ではなく、登校中の朝に購入する必要があったのだろうか。ひょっとすると、朝に購入しないと売り切れてしまうほど、人気なオクラだったのか。いや、それなら落とすことはないだろう。それに、そもそもなぜオクラなのだろうか。このオクラを購入した人は、よっぽどオクラが好きだったのだろうか。人の好みは千差万別なので、そのことについてとやかく言う積もりは無いが、数ある野菜の中でオクラが一番好きという人に、私は生まれてこの方会ったことが無い。謎は深まるばかりであった。

その後も色々な想像を巡らせたが、答えは分からずじまいだった。ここ、摂南大学枚方キャンパスの敷地内にはそこそこ大きな農場がある。もっとも素人目線の感想なので、本業の方が見ると小さい規模なのだろうが。恐らくその農場で収穫されたオクラなのだろうと見当をつけたが、それさえ当てずっぽうである。私は諦めて、一限目の講義が行われる教室へ

と向かった。

翌日。いつものように駐輪場を出ようとすると、視界の隅に細長い物体が飛び込んできた。もうお分かりだろうが、オクラである。炎天下で放置されていたためか、昨日に比べて少しなびているようにも見えた。

気にはなったが、私はオクラを無視して教室へ向かった。どうやら持ち主が拾いに来ることは無かったようだが、私に出来ることは無い。そもそも野菜の落とし物は、多くはないが確かに存在するものだ。私も以前、何度か見たことがある。大根が落ちているのを見たときは、流石に驚いたが。とにかく気にしないことにしよう、と私は思った。答えが出ない問いとは、人生において山ほどあるものだ。そんな事を考えながら、私は教室へと向かった。

四日目。自転車置き場を出ると、またオクラが目に入った。しかしその姿は昨日までとは打って変わり、枯れ草のように干からびている。甘い食べ物ではないのでアリが分解するとは思っていなかったが、まさかカラカラに干からびるとは思っていなかった。オクラも植物

なので当たり前なのだが、その光景は新鮮だった。干からびているのに新鮮とは、おかしい話なのだが。

何も分らないまま私のオクラ観察は終わりを迎えたわけだが、実はこの話には続きがある。週末、母が見せてくれた「広報ひらかた」に答えがあったのだ。私の実家は枚方にある、定期的にこの広報が届く。どうやら「枚方産の野菜を食べよう」という企画の一環で、摂南大学の取材があったらしい。「摂南大学 オクラ」とでも検索すれば詳細は分かるはずなので、気になった人はぜひ調べてみてほしい。最後は枚方市の宣伝のようになってしまったが、決してそういう意図があったわけではない。多分。

レポートをぎりぎりで提出した話

レポート。それは多くの学生を苦しめる課題の一つである。作文とは違い、自分の意見を記述してはならない点も、学生を苦しめる要因の一つであろう。かくいう私も、レポートを書くのは大の苦手である。そこで前期にあったレポートにまつわる話を、一つ書いておくことにする。

レポートを書くのには、様々な手順を踏まなくてはならない。構成を考え、何度も微調整をしながら書き直し、期限までにまとめて提出する。もともと作文など文章を書くことが大の苦手だった私にとって、長文を書くのは最も苦手とするところである。この文化大賞に文芸部門で応募しようと思ったのも、苦手意識を払拭するため、というのが理由の一つにある。話を戻そう。私はレポートを書くのが苦手なので、書きあがるのもかなり遅い。

提出物になるべく早く出すことを心掛けているので、レポートも早めに書き上げたいと

ころなのだが、苦手意識があるせいで中々進まない。夏休みの宿題を最終日まで残す子どもと同様、最終日の数日前になってようやく焦りだすというのが常だった。こんな状態では、四年時の卒業論文が思いやられる。

その日、私はとある教科のレポートに追われていた。翌日が最終日だったのだが、まだ半分ほどしか作成できていなかったのである。私以外の家族は皆寝静まり、静かな空間でキーボードを叩く音だけが響いていたのを覚えている。毎日六時間以上は寝なければ気が済まない私にとって、レポートは大敵である。

しかし、そんな状態でも書き続けていれば終わりが来るものだ。字数制限のあるレポートだったので、なんとか日付が変わる頃には書き終えることが出来た。私の家にはプリンターが無いので、レポート等を印刷して提出しなければいけない時は、基本的にコンビニ印刷に頼っていた。コンビニは二十四時間営業なので夜中でもプリントは出来るのだが、私は眠気がピークに達していたため、書き上げてすぐに寝てしまった。この時少しでも最終確認をし

ていれば、あんな事にはならなかっただろう。

翌日。私は少し早めに大学へ来ると、大学のすぐ向かいにあるコンビニでプリント印刷をしていた。しかし、プリンターからレポートが出てくる様子をぼんやり眺めていたその時、すぐに私は自分の失態に気が付いた。

ホッチキスを家に忘れてしまった。

しかしホッチキスならコンビニにも売っているし、自宅までの道を少し戻ってニトリモールまで行けば、ダイソーもある。何とかなるだろうと甘く考え、私はひとまず大学のキャンパスへと移動し、自習室でレポートの最終確認をした。一番重要な失態に気が付いたのは、その時である。

ページ番号が、無い。

その教授は、レポートにページ番号を付けるようにと指示していたのだが、私が印刷した紙にはそれが抜けていた。コンビニ印刷にかかった代金が無駄になってしまったやるせな

さと、もう一度印刷し直さなくてはならない面倒くささを感じながら、私はパソコン室へと向かった。大学入学時に買ってもらったノートパソコンを自宅に置いてきてしまったのと、パソコン室なら無料で印刷できるのではと淡い期待を抱いたからだ。

パソコン室に着いた私は、早速Wordを立ち上げ、保存したはずのレポートのデータを探し始めた。しかし、無い。確かに、保存したはずなのに。

そこで私は、ある一つの可能性に思い当たった。

もしかすると、家に置いてきたノートパソコン本体にデータを保存してしまったのでは10
ないか。

パソコン本体、という言い方も正しくないのかもしれないが、入学祝にパソコンを買ってもらうまでともにパソコンに触れたことが無く、知識も無い私にとっては分からなかった。というより、恥を忍んで言うなら今でもあまり理解してはいない。しかし、パニックで頭が真っ白になった私には何も考えられなかった。

保存されていない以上、レポートを書き写し、ページ番号を付けた状態でもう一度印刷し直すしかない。

私の頭に浮かんだのは、そんな突拍子もないアイデアだった。今になって考えてみれば、多少時間はかかろうとも自宅へ帰ってパソコンを持ってきた方が、圧倒的にタイムロスも少なかったと思う。なんせ私はその日、学校近くのコンビニでプリントアウトをしようと普段より早めの時間に登校していたのだから。しかし今となっては、それも机上の空論である。

考えながら書くわけではなく、キーボードで同じ文字をなぞるだけなので、作業は比較的にスムーズに進んだ。しかし悲しいことに、私のタイピング速度はかなり遅い。自宅へパソコンを取りに帰っていた方が良かったのではないかと今更ながら後悔しつつ、私はひたすらキーボードを叩き続けた。レポートは講義内で回収されるという話だったので、精神的にも時間的にも余裕も殆ど無かった。それもこれも、提出期限ぎりぎりまでレポートを仕上げていなかった私が全ての元凶なのだが。

しかし焦った甲斐あって、なんとか講義前にはレポートを打ち写す事に成功した。ページ番号が表示されていることを確認し、震える手で「印刷」の文字にカーソルを合わせる。パソコン室のプリンターは利用したことが無く不安だったのだが、問題なく印刷することが出来た。プリンターに心から感謝したのは、後にも先にもこの時だけだろうと思う。

なんとか印刷は出来たが、よくよく考えるとまだ課題は残されていた。そう、ホッチキスである。しかしようやく印刷が出来たのは講義十分前だったので、ダイソーまでホッチキスを買うに行く余裕はない。貴重なバイト代をこんな場面で消費するのは気が進まなかったが、背に腹は代えられない。私は慌てて大学構内のコンビニに走った。実験用のメガネも売られているくらいなのだから、ホッチキスもあるはずだ。そう思って文房具コーナーへ歩を進めると、そこにはきちんと青いホッチキスが並んでいた。横にはホッチキスの芯も一緒に並べられており、「ご一緒にお買い求めください」との文字が躍っている。ホッチキスの芯の事はすっかり失念していたため、その文字が無ければ私はホッチキスのみを購入してし

まい、レポートの提出も間に合わなかっただろう。その注意書きを作ってくれたであろうコンビニ店員の女性に感謝しながら、私はホッチキス本体と芯を持ってレジに並んだ。しかし急いでいるそんな時に限って、列はなかなか進まない。ようやく順番が来た時には、講義開始まで三分を切っていた。

慌てて講義室まで駆け上がり、自分の席に滑り込む。ホッチキスの包装を解き、早速レポートを綴じようとしたが、ふと疑問がよぎった。

レポートを綴じるのは、右上だったのだろうか。それとも、左上だったのだろうか。

習慣的にこなしている動作は、一度迷うと中々分からなくなるものである。蛇口はどちらの方向へひねれば水が出るのか、肩掛けバッグはどちらの方向にかけていたのだろうか等、挙げるときりが無い。最も、後者の悩みを持つ人は少ないかもしれないが。

再び脱線してしまったので話を戻すと、私はレポートを左右どちらの角でとめるべきか考えあぐねていた。レポート作成時の注意事項をまとめた紙は配布されていたのだが、こん

な時に限って見つからない。教授は列の最後尾に座る学生に指示を出し、列ごとにレポートをまとめるよう言っていた。迷っている時間は無い。当てずっぽうで選んでも、当たる可能性は二分の一である。とにかく、早く留めなくては。

私は覚悟を決めて、レポート用紙の右上を綴じた。その瞬間レポートを集めていた学生がすぐそばに来て、私の書いたレポートを回収していった。どうやら待たせてしまっていたらしい。何にせよ、今は無事にレポートが提出できたことを喜ぼう。

清々しい気持ちで前を向くと、前の席には左上で綴じられたレポートを持った学生が大勢いた。いや、その言い方は正しくない。私が見た限りでは全員、左上でまとめたレポートを持っていた。そう、私は二分の一のチャンスを間違えたのだ。おかげでその日の講義は、なかなか身が入らなかった。

一学期前期で一番悪い成績をとったのは、何を隠そうこの科目である。この一連の経験から私は、提出物は早めに終わらせること、完成してもすぐには気を抜かずに最終確認をしつ

かりすること、という教訓を得たのである。代償は重かったが、良い勉強になったと思った
い。というより、そう思わなければやっていけない。

あとがき

この作品は、私が摂南大学一回生前期で経験した出来事を書いたエッセイであり、日記のようなものである。日記替わりでもあるノートに記録していた内容を思い起こし、まとめ直したもののなので事実と食い違う点があるかもしれないが、そこはご容赦願いたい。本当は学食無料券を使用した話や登校中に折り鶴をもらった話も書くつもりだったが、それらをまとめるだけの時間や精神的余裕がなく断念してしまった。レポート以外でここまでの長文を書いたのは初めてだったので、普段から文章を書く練習をしておくべきだと思った。

最後に、私の稚拙な文章をここまで読んで下さってありがとうございます。これらの文章を、少しでも面白いと思っていただければ幸いです。

